

第五章 第三の生き方

一、統一認識

第三の生き方は頭脳、英知で自然に適応して生きる生き方である。その英知を得るためには、統一認識(哲学)を得て、その統一認識の下に社会科学の体系化を図らなければならない。それでここでは、先ず、社会科学の体系化の基礎となる統一認識を明らかにする。と言っても、これまであらゆるところで述べてきた原理的な認識をここで統一的に述べてみようというのである。どこまで述べられるか分らないが、述べてみよう。

文章でも話でも出だしが大事である。出だしが悪いと最後までいいところなく終わってしまうことが多い。何事にも入り方というものがあるのである。ものの考え方についても全く同じことが言える。仮に、複雑な文明社会について考えて見るとすると、どこから考え始めても一応の線までは行ける。しかし、そのほとんどは壁に突き当たってしまう。だが、ただ一つだけ壁に突き当たらない入り方がある。それは人間の存在から考える考え方である。私は二十四年間思索してきたが、そのようにはっきり言える。真理は一つと言われるが、正にこのことだろうと思われる。

それでは一体、なぜ人間の存在から考える考え方だけが行き詰まらないのか。それは人間がすべての根本だからである。具体的に述べると、原始社会であろうと文明社会であろうと、はたまた空気、水、食糧、人口、科学技術、都市、交通、物価等の問題であろうと、さらに、キリストやマルクスやケインズの思想であろうとも、すべて人間の存在と関係のないものはない。逆に言うと、もし、この世に人間が存在していなかったなら、人間に関わるこれらの問題は一切起こっていなかったろうし、人間が存在しているからこそ問題にしなければならないことばかりと言える。このように人間はすべての根本であり、その根本の要因から考える考え方のゆえに行き詰まらないと言える。ただし、人間を根本からありのままに捉えてかからねば駄目である。このことを具体的に述べてみよう。

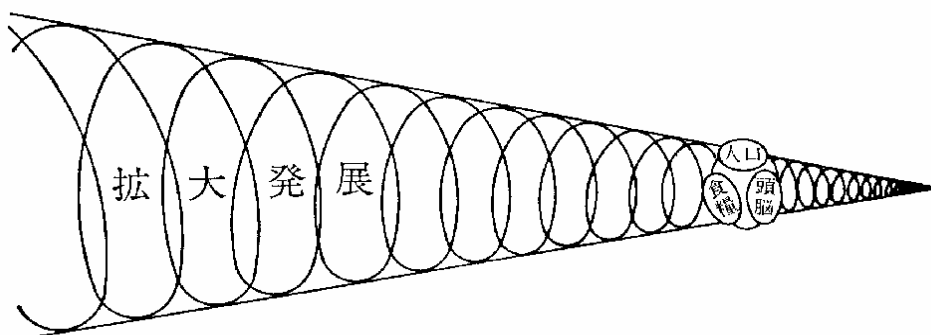
我々は、この世に自分の意思で生まれ出たわけではない。しかし、どんな偶然や事情から生まれ出ようと、この世に生まれ出た瞬間から個体維持の本能によって、自分自身を理屈抜きに生かしていこうとする努力が始まる。もちろん、これは人間ばかりでなく、動物一般にも言えることである。そして、小さいうちは親の助けや保護を必要とするものもあるが、動物はすべて生きるためには、絶えず環境から食糧、空気、水等を体内に取り込み、排泄物はその環境に排出するという行為を繰り返さなければならない。そこには、物質の循環が見られる。それゆえ、この地球上に人間が存在しているということは、人間を軸に

物質の循環が起きていることを意味する。すなわち経済活動である。この経済活動は、そういう生理的欲求をもつ数多くの人間、すなわち、人口が多くなればなるほど、それだけ大きい経済活動が起こるし必要ともなる。したがって、その人口や経済活動の規模に応じて、社会も拡大してきた。

そして、その基本的な経済活動に、人間の多様な欲求、発明、発見等によって第二次、第三次産業が組み込まれ、更に芸術、文化、通信、交通等も組み込まれて、今日の多様な社会となっているのである。このように、人間の存在の根本から考えると、すべてが行き詰まらずに捉えられるのである。

なお、人類の全活動の根底にある普遍の論理を、人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理として捉えてかかると、便利なことに、そして不思議なことにこれから人類の活動のすべてが説明つけられるのである。言い換えると、その論理を捉えて、それに基づいて思考するならば、社会のすべての問題は芽づる式に解明出来るということであるこれまでもその論理に基づいて人類の現在までの生き方に関する様々な問題を論じてこられたし、これからもその論理に基づけば人類のこれからの生き方に関する様々な問題をいろいろと論じられると確信している。それでは以下、人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理の説明を試みよう。

人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理



第四章の「第一と第二の共通性」で、人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理について、「原始時代にも文明時代にも、また、未来にも、つまり、人類の存在が続く限り、この論理が一貫して人類を支配していく。原始時代の人類が栄え人口が地球にいっぱいになって限界となったのも、また、その限界を突き破って文明化したのもこの論理によるし、さらに、その文明がこれほどまでに栄えて第二の限界を迎えているのもこの論理による。

恐らく、この論理で説明出来ないものはないと思われる。もちろん、この論理に基づいて今日の限界の理由、解決の方法、新しい生き方等の発見も可能である。これが社会のすべての根本論理だからである」と述べた。その論理をズバリ説明すると、まず、人間の存在がある。その人間は食欲と性欲と頭脳をもっている。生きるために食糧を摂取し、成長す

ると性欲を充たして子孫を増やす。人口の増加である。頭脳はその間の障害解決役である。そして人類はその同じ論理で約二百万年間、限られた地球上に絶えず前頁の図のように拡大発展してきた。その間、第一の限界に突き当たったが、それを苦難の未突破してきた。しかし、今日、再度限界に突き当たって、その突破が可能かどうか難しい状態にある。しかし、社会の中にあるこの普遍の論理を認識して、それに社会の方向や運営の仕方を教えられてかかるなら、第二の限界の突破も不可能ではないと言える。これをもう少し具体的に述べてみよう。

今日の社会はマンモス化し、複雑化し、よく理解出来ない社会となっている。しかし、何事にも本質、基本となるものがあり、社会の基本となるものを発生学的視点から捉えて、それに基づいて論理を展開したなら、社会の正確な全体像が明らかに出来るはずである。自然は人類を生むと同時に生きる条件を与えている。一方、生み出された人間はこの世に目的があって生まれたり、生きているわけではないが、生まれた以上、理屈抜きに生きたいという本能に支えられて生きている。具体的には生きたいという欲求、生きるために食べたいという欲求を持ち、自然に働きかけて生きている。これは人口と食糧、つまり、経済活動という形をとる。人口は種族保存の本能から常に増加の傾向をとり、食糧はその人口に見合う量の確保が必要であり、それだけ経済活動は拡大循環化されねばならない関係となる。これらの関係は、約二百万年前の原始社会にも今日の社会にも、さらに何万年先の未来の社会にも共通のものであり、人類が存続する限り永遠に変わらない原理である。歴史を振り返って考えてみよう。経済制度が、自然採集経済から人工栽培飼育経済に移行したことによって、社会制度も原始社会から文明社会へと質的大転換をしたが、これによって、自然と人間の本質的な関係、それに、人間の生きる原則まで変わったであろうか。自然経済下の生活は、自然法則、自然環境に頼らねば生きられない、自然そのものの生活であった。これに対し、人工栽培飼育経済下の生活は、植物の人工栽培、家畜の飼育等による人工生産的な生活であった。確かに、この両者の間には大きな違いが感じられるが、人工栽培飼育と言っても、自然法則の百パーセントの応用であり、言うなれば、自然の成長力にただ人間が手をかして、その成長を助け、成長の効率を良くしたに過ぎない。したがって、経済制度の変化があったからとて、自然と人間の本質的な関係が少しも変わってはいない。また、経済制度が変わったからとて、人間は食べものを食わなくても生きられるようになったわけでも、人口増加が止まったわけでもないから、人間の生きる原則もちっとも変わらないのである。原始時代から文明時代へと質的大転換をしたというと、何か生き方の基本までが変わったように特別に考えがちだが、人類発生の約二百万年前から、今後どんな社会になろうとも、人類は同じように地球上に住み、自然から採れる食べ物を食べ、子供を生んで生活していくという原則は変わらない。その意味で、約百九十九万年もの長い間続いた原始時代の単純な経済活動や生き方が、全くの見本で、永遠に複雑さを加えて続く経済活動や生き方の基本、原型である。こういう基本的な経済活動や生き方が、永遠に続く社会の(車でいうとシャシーに当たる)骨組みとして根底にある。原始社会はシャ

シーだけの社会、現代はボディで覆い装飾を加えた社会である。したがって、現代の社会は構造や原型が見えなくなっている社会と言える。以上のことを要約すると、人類の社会は永遠に、しかも、複雑に移り変わっていきこうと、その根底には永遠普遍の要因があるのであって、決して、不規則的に予想しにくく変化していくものではないということである。したがって、編曲拡大された社会の枝、葉の面、つまり、現象面からのみ見る見方を改めて、社会を本質的な面から見る眼をもたなければならない。こういう本質的な見方をすることによって、永遠的な生き方が見出せるのである。

この章のテーマである第三の生き方とは、具体的には人口や多様な欲求や工業等の増大を止めて、地球の食糧、水、空気、空間、太陽エネルギー、生態系等に均衡して生きる生き方のことである。いくら人類が頑張っても、自然の法則までは作れないので、自然をのり越えることは出来ない。つまり、この地球の有限性を無限性に換えることはできない。人類はそういうものである以上、約二百万年間の人類の生き方の中に一貫して見られる人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理と、その論理を軸として成り立っている無限性の諸論理、社会の自己運動性、弱肉強食の論理等をコントロールして、有限な地球生態系に均衡して生きる生き方を行なう以外に生きのびる途はない。ところが、この生き方こそ本来の生き方であって、永遠化可能な生き方なのである。つまり第一、第二の生き方のように限界の来ない生き方なのである。

以上のように人類の生き方のすべてを統一的に認識することが出来る。この認識だけでも、総論的な英知として人類に役立つが、さらにこの統一認識に基づいて社会科学を体系化して用いるなら、人類の頭脳はいよいよ確実に具体的なものとなる。それが現実化すれば、頭脳だけを頼りに生きていかなばならない動物に進化した人類が、初めて、その進化の真の軌道に乗ることになる。

私はこの地球生態系と社会生態系と人間生態系を統一的に捉えている認識を思想ではなく真理だと思っている。考えたものではなく、誰れにでも捉えられるような型で存在していたものを認識したものだからである。そして、また、約三十九億人の生命が危ぶまれている昨今、真に期待されていた哲学もこれであると確信している。言い換えるなら、自然の論理のコピーとしての論理、すべての人々が合意出来る、真理としてのこの論理が期待されていたのだと思っている。

これまで統一認識というテーマの下で、第四章までのあらゆるところで断片的に述べてきた原理的な認識の統一を試みてきたが、必ずしも満足のいくできではない。しかし、賢明な読者は私がここで見事に統一して見せなくても統一化する前の内容を十分理解してくれているに違いないと信じて、この節を終ることにする。

二、英知先頭の社会

第三の社会は英知的な頭脳による、英知先頭の社会である。社会科学の対象は社会であるが、第三章で「その社会が複雑で難しいために社会科学は発達しない。しかし、社会には、よく見ると芽づる式に統一的に認識出来る特徴があるので、本気になって取りかかれば、統一的に社会を認識出来、その統一認識に基づいて、社会科学を大発展させることが出来る」と述べたが、前節では、そのうちの芽づる式に捉えられる統一認識について述べた。その統一認識に基づく社会科学の体系化については次の節で述べるが、そこで体系化された社会科学はこれからの文明社会を誤りたく運営する真の具体的な、人類の頭脳として奉仕するに違いない。そうなれば、第三の生き方は、必然的に英知先頭の社会となる。それは文明化してから、初めて人類が本来的な理想の形となることを意味する。今、理想の形と述べたが、これからは、実際にそういう形になっていかなければ、これまで何度も述べてきたように、また、誰れでもが肌で感じているように、人類の未来はあり得ないのである。曖昧な知識、後手政治では社会の論理、自然の論理に対応出来なくなって淘汰されてしまうからである。本当の意味で、本格的な頭脳の登場がなければ破滅してしまう時代になりつつあるのである。こういう段階になっても、政治があるではないか、と政治に期待をかける人もあるが、それは愚の骨頂である。真の頭脳が欠如している下での政治は、社会の自己運動にただ調子を合わせて、最終処理役を務めているだけの破滅の進行係に過ぎないからである。それは、前にも述べたが、政治家が悪いのではない。なるほど政治家は国民から選ばれる。したがって、一見、優れているように見える。

しかし、政治家も国民のレベル以上にはなれないし、レベル以上の政治は行なえないのである。社会をどう認識したらよいか、これからどう生きたらいいのか分らなくなっている衆愚から選ばれた政治家は、やはり、衆愚政治家であって、衆愚政治しか出来ないのである。だからこそ、これからは政治に期待してもどうにもならない。本当に期待すべきものは頭脳、英知である。国民をレベルアップさせ、破滅から救い、永遠的な生き方へ導く頭脳、英知である。頭脳が曖昧であれば、今、我々がどういう運命の下にあるのかさえも分らないし、もちろん、有効な計画も政策もたてられない。行動の前に計画が必要であり、その計画の前に先ず頭脳、英知が必要なのである。頭脳は人類の力であり、命である。特に、これからは本格的な頭脳をもたずして人類は存続できない。本格的な頭脳をもって、その頭脳を先頭にして生きる生き方こそ、期待すべき、また本来あるべき生き方である。私は今、こうして第三の生き方について述べているが、第三の生き方とは、本質的に言うところからの生き方のことではない。第三の生き方とは、英知的な頭脳によって創り出す生き方であって、必然的に訪れる生き方でない。

第三に移行出来ず、あるいは、このまま第二の生き方で人類は終わってしまうかも知れない。だから、第一条件として第三の生き方に移行するためには英知的な頭脳をもたなければならないし、移行後も誤りなくその第三の社会を運営するためには、英知的な頭脳がなければならない。そこでの政治の役割は、今すぐ述べるが、そのようなことで、第三の社会は

英知的な頭脳による英知先頭の社会であるし、もし、英知的な頭脳が生まれなければ、第三の社会は誕生しない。仮に、中途半端な頭脳のままで偽の第三の生き方が生まれたとしても、間もなく破滅してしまうに違いない。ついでに述べるが、第三の生き方が考えられるなら、第四、第五の生き方は考えられるのかということ、第三以降の生き方は考えられないのである。第三の生き方の編曲的な生き方は考えられるが、それは第三の生き方の域を脱する生き方ではない。第三の生き方こそ、最後の、そして、永遠的な生き方である。さて、第三の社会の政治について少し述べよう。第三の社会の政治は、やはり、民主主義政治である。ただし、第三の社会の政治は、シンクタンク(次節で述べる)によって国民のすべては英知化しているため、衆愚政治ではなく英知政治となる。それよりも、第三の社会はシンクタンクによってすべてが解明され、国の運営の方向も仕方も具体的な青写真となっているため、政治家はただ、それを実行するだけの専門家の立場になる。つまり、すべてがお膳立てされた上で主役を演じるジェット機のパイロット、あるいは、新幹線の運転士のような立場になると考えられる。したがって、第三の社会の政治家は、今日のように余り哲学をすることもなければ、責任を一身に背負い込む必要もなくなる。しかし、それだけに、余り優越感も権力も持てない立場となる。そして、第三の社会は実質的に英知先頭の社会、つまり、社会科学先頭の社会となって、人類の真の頭脳が運営する社会となるう。

三、シンクタンク

さて、いよいよ社会科学の体系化を図って人類の具体的な英知を得るための努力をすべき段階にきたが、しかし、これはただペーパー上に原子記号を並べるように社会科学の体系化が見事に出来ればそれでいいというものではない。いかに生きた社会の中で現実化出来るかがむしろ問題であるから、その立場から考えられなければならない。それには考える工場、又は、頭脳集団とも言われるシンクタンクを組織して具体化するのが一番いいと思う。第三の社会は後で詳しく述べるが、計画均衡社会、世界国家、計画経済社会、民主主義社会、自由平等社会、人種混合社会等の顔をもつべき社会であるから、シンクタンクもそういう未来社会を実現して更に運営して行くのに適する組織として作られなければならない。そういうシンクタンクを作るためには、先ずシンクタンクを作るための準備会を組織して、統一認識の吟味から始めて社会科学の体系化を含めたシンクタンクの構想が描かれなければならない。これから参考まで私が考えているシンクタンクの構想を述べてみよう。

人体というものは、肝臓も胃も目も耳もその他も、一つの和となって有機的にリズムカルに組織的に活動しているもので、決して、それぞれの機関が自己主張することなく相互扶

助的な営みをしていると言えるが、シンクタンクもそのように組織されなければならない。先ず世界全部の研究機関を一つの大シンクタンクに組織し、各機関が本部機関の指揮に従って統一的な研究が行えるように運営されなければならない。換言するなら、シンクタンクは統一認識と一致とする具体的成果が得られるように組織され、運営されなければならないということである。

本部はいろいろの役割をもつが、第一に、世界全体から選ばれた必要な人数からなる哲学者集団、社会学者集団、自然科学者集団、技術者集団、行政担当者集団、評論家集団、世界市民集団といったあらゆる分野の人々が参加して、大シンクタンクを指揮コントロールする役割を負う。

第二に、本部は知識銀行、資料センターとして、世界国家、世界国民に完全に解放されていて、あらゆる情報提供の求めにいつでも、容易に答えられる組織となっている。もちろん、その情報は支部機関を通じても入手出来る組織となっている。

第三に、第二とダブるが本部にはこれからの人類のあり方、その他の一切を先き取りし、政治に必要な一切の計画、政策、立案を常に用意してある(その場合、政治は忠実な実行機関として存在することになる)。

第四に、本部は教育、マスコミを通じて、常に世界国民の知識水準をシンクタンクの水準に引き上げる努力をし、総英知化を図っていく。そうすれば大衆は賢衆となり、賢衆政治となり、自分らで永遠化をかちとることが出来るようになる。ほとんどの人は統一認識をよく知れば、細かいことは分らなくとも英知的となり、賢者となる。何が本当で、何が嘘かもみな分るようになる。そこでは情報洪水も終焉するし、合意が得られるところから戦争も終焉する。

本部はその他、人類の一切の用を足せる頭脳機関としてある。大体、以上のように考えられる。では、果たして、そういう人体のような有機的な組織が可能かという問題が起こるが、我我はそれを可能にしなければならないのである。それは非常に難しいことではある。しかし、第三の生き方は頭脳で作り出す生き方である。したがって、人類がこれ以上、地球に存在を望むなら、やらねばならぬことである。人間、生命(いのち)をかける時、何事もやれないことはないと言われるが、正にこれこそ、人類が生命をかけてやらねばならぬ課題である。

私はこの構想を昭和四十四年の春に描いたが、翌四十五年に万博に行ってみて、その具体的な模式図を見たような気がした。いかに、万博の本部が前々から構想を練り、努力していたとは言え、言葉や習慣の違う国々を世界各地から一堂に集めて、予定通りに、しかも、見事に組織化して見せたのには驚いた。私はあれを見て、これだと思った。さらに驚いたのは、インドネシア館に入ってである。インドネシア館の主張は「多様性の中の統一」ということであった。

それはどういうことかと言うと、インドネシアは一万三千の島々に百以上の種族からなる、一億一千万の人口が散在している国であるが、今、統一国家をめざして努力しているとい

うことであった。私は、これこそ万博そのものだと思ったと同時に、未来の大シンクタンクはやれば出来ると確信した。また、シンクタンクのモデルとして考えられるのはアポロ計画である。あのアポロ計画に参加した科学者、技術者は三十万人と言われる。それらの人六はすべて、一つの目的に力を合わせたのである。第三の社会実現のためには数百万、あるいは、それ以上の研究員を組織しなければならないだろう。しかし、アポロと違って、是が非でもやらねばならない事業である。アポロがやれて、同じ一つの目的となる第三の社会がやれないことはないと確信する。方法論が確立していない場合ならともかく、確立したからにはアポロ計画と同様に大量の人が参加して出来ると確信する。出来るということは、とりもなおさず、第三の生き方が可能となることであり、第三の生き方が可能となることは人類の永遠化が可能となることであると言える。

大雑把であるが、以上のように構想することが出来る。この私の描いた構想がそのままタキ台として生かされれば嬉しい。なお、以下の節でもこのシンクタンクについては少しずつ触れていくので、その内容が一層明らかになっていくものと思われる。最後に、このシンクタンクで主役を演じるべきスタッフは、社会科学者集団であることを特に述べておきたい。

四、教育と情報洪水の終焉

これまで第三の生き方を実現するために必要な統一認識とシンクタンクについて述べてきたが以下順序不同になるが、第三の社会としての世界国家の姿、これからの日本のとるべき態度等を述べると同時に、第三の社会における情報、労働、余暇等の問題を述べる。また、第三の社会における我々のとるべき態度として必要な、人間の尊重や合意の問題についても述べる。それでは、先ず教育の問題から始めよう。

教育は非常に混乱している。恐らく史上類例を見ないほどの混乱であろうと思われる。それは教える側がどう教えたらいいか分らなくなっているところからきている。言い換えると、それは社会が複雑となり、教育は政治とも経済とも切り離しては考えられない関係となって、純粋に筋の通った教育が出来なくなっているところからきていると言える。そのため、どのように教育は行なわれるべきかといった議論が、常に繰り返されているわけであるが、しかし、教育とは仕事のための訓練であるとか、社会に出るまでの個人の準備期間であるとか、人間の個性や創造性をさらに発展させるためのものであるとか、といった程度の認識の下では、議論が噛み合うはずもないし、正しい教育を期待することも出来ないと言わなければならない。

教育とは本質的に言うと、生き方のすべてを教えることである。生き方と言うものは、社会と関連するものであるから、社会がよく把握されていなければ確信のある教育は出来な

い。昔の社会は単純だったので、割合よく把握されていた。したがって、確信をもって教育は出来た。

しかし、今日の社会は複雑に発達した社会で、よく把握されていない。したがって、思考は悪循環するようになり、すべて、壁に突き当たる思考ばかりとなり、とても確信をもって教育は出来なくなってしまった。教育の重要なことは何時の時代でも同じである。しかし、今日はそういう意味で教育が一層重要であるというか、問われているのである。

問われているものと言うと、何も教育だけではない。一切の基盤である社会が認識出来なくなっているのだから、経済も政治も、そして、文明までの一切が問われているのである。したがって、社会全体が統一的に認識されない限り、教育を含めた一切が解明できない状況にある。私は、この問題にこれまで、挑戦してきたと言える。前節では、そのための具体的な構想を述べ、少々教育の問題にも触れた。私の構想に近いシンクタンク化が実現すれば、真の教育が取り戻せ、世界国民の知識水準は、シンクタンクの水準に近くなり、英知的世界国民が出現しよう。学校教育においては、小学、中学、高校、大学の各段階に応じて、本質面に重点をおいた教育が実施され、自然や社会を根本からしっかりと認識出来る人間が作られると思う。社会人に対する教育は、マスコミを通じて行なわれるが、これも、本質面に力が入られよう。

欠けているのは本質面の認識だからである。こうして、ほとんどの人が統一認識をよく理解出来るようになって、英知人になると、細かい情報にいちいち耳を傾けなくとも、いろいろ判断が出来るようになるため、今日のような情報洪水は次第に終焉するものと思われる。

今日の情報洪水は全くひどい。前にも述べたように、社会そのものが全く分らなくなっているため、人々の思考は百人百様のであり、それだけに、いくらでも述べる種がある。時は、資本主義時代で、述べればいくらでも金になるというわけで、マスコミ界は、まさに花ざかりである。マスメディアは各種思想、アイディアの発表会場だ。そして、情報は氾濫し洪水化している。その中で人々は、溺れるようにして、人生の糧となるような情報を探し求めている。しかし、あるものはほとんど、らっきょうの皮みたいな情報ばかりであって、ただ、悪循環思考に拍車がかかるだけとなっている。いかに現代は、言論が自由だとは言っても、余りに千差万別雑多で、大衆はどれを信じてよいのか全く迷っている。それゆえ、思想の交通整理が最も必要な時と思われる。

しかし、これは、シンクタンクによって整理されよう。シンクタンクが実現すれば、自ら思想は交通整理されるし、仮に、されなくても、英知化した人々の選択によって、必然的に情報は整理されていくものと思われる。そうすれば、今日のような情報の洪水はなくなり、マスコミも統一認識に添った情報だけを流すようになるものと考えられる。

五、合意

第三の社会は合意による生き方の社会である。これまでは選択の時代で、生き方にも、いくとおりかの選択が出来た。奴隷制社会、封建制社会、資本主義社会、社会主義社会はそれである。それらを詳しく見ると、さらにいくとおりにも分かれる。資本主義社会を例にとって述べてみると、植民地を作って運営する方式、植民地を作らずに運営する方式、軍備を持たず純経済主義だけで運営する方式、計画性をとり入れて運営する方式、福祉優先主義的に運営する方式等というように、いろいろあるのである。もちろん、いろいろ選択出来たとは言っても、それは文明社会の中でであり、それも人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理による拡大循環的な発展に添ってであった。然るに、人類は今日に至って、地球のすべての有限性に突き当たってしまって、選択の道はただ一つしかなくなったのである、それは人類が英知化して、人類側から地球にピッタリと適応して生きる生き方である。これの説明については、これまで、何度も述べて来たので、ここでは省略するが、似たような認識は、私以外にも述べられているので、すでにかなり共通の認識が生まれているものと思われる。この共通の認識が合意である。こういう合意が全人類に出来なければ、第三の社会は本物とはならない。第三の社会は皆の合意によって納得の上に作られるべき社会だからである。それゆえ、各人が統一認識をして、真から合意に達することが必要である。しかし、この合意は、私がくどくど説かなくとも現象がそのように教えているから、必然的に成立する時がくると思われる。つまり、人口がこれ以上に増加することがいいことか、人口過密の状態の中でエゴを主張し合えばどうなるか、経済成長はいいことか等について、みんな、体で分ってくると思われるということである。しかし、その場合の合意は、実際に理実がそうならなければ成立しないものである。現実にもちびかれて、いくら合意が成立しても、もう、どうにもならなくなり、かえって、弱肉強食が増すだけとなろう。したがって、合意は先取りをしなければならぬのである。選択の余地がまだ残されている段階、それだけに、議論も分れる段階でみな統一認識をして、このままいったらどうなるかを先取り的に合意し、第三の社会を実現しなければならない。

そして、この合意は悲観的、諦観的な合意ではなく、逆に、積極的な合意でなければならない。具体的に述べると、我々には、もういくつもの選択の道はなくなり、狭いところに成長もなく、限界的に生きる外はなくなったという悲観的、諦観的な合意ではなく、逆に、頭脳で生きる人類に変身、人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理、有限な地球等の論理から言っても、地球に人類側から頭脳で適応して生きる生き方こそが、本来的なのだという積極的な合意でなければならない。事実そうなのだから。

また、この合意は、各国の人々がこだわる価値、理想、理念以上に、高い価値、理想、理念がなければ不可能であるが、第二の限界を迎えつつある時、地球に人類側から適応して人類の永遠化を勝ちとろうという提言よりも高い価値、理想、理念はないはずである。したがって、こういう提言は、あらゆる立場をのり越えて合意出来る提言であると、私は確

信している。

六、人間の尊重

合意と関連して述べたいことは、人間の尊重についてである。ここ暫くの間、人口は、もっともって増えて、社会はさらに過密になっていくに違いない。したがって、将来実現する第三の社会は、かなりの人口密度の社会と言えよう。人口が多くなると、ますます軽視されがちとなるのは、人間の生命と権利である。第三の社会においても、その可能性はある。しかし、第三の社会にあっては、決して、そうあってはならない。そこで、私の人間尊重論を述べ、合意を得たいのである。

この私の人間尊重論は大学時代の初期にすでに完成し、これまで述べてきた哲学の根底をなすと同時に、今日まで、私自身の行動を規制してきた。

宇宙の歴史は無限であり、広さもまた無限である。その無限の宇宙の中には、地球と同じような生命を抱える星が何億もあると言われる。我々は奇遇にも、無限の宇宙の中の地球という一つのケシ粒のような星に生まれ合わせた仲間である。我々は誰一人として自分の意思で、この歴史の一瞬間とも言える一点に、生まれたくて生まれたものはいない。みな自我に目覚めてから自分を知り、奇遇な存在であることを知ったのである。我々は目的をもって生まれ出たわけではないが、生まれ出た瞬間から“死にたくない、生きたい”という根源的欲求に基づいて生きている。社会はそういう一人一人の集団である。

よく人間は万物の霊長であるとか、尊い存在であるとかと言われる。しかし、いま述べたように、存在の背景を考えると、人間も他の動物も全く同じであり、人間だけを尊く見る客観的理由は見当たらない。もちろん、頭脳の発達も文明化して生きていることも、尊いとする根拠にはならない。全く他の動物と人間は平等としか言えない。人間は尊い存在だという思想は自然界の誰れも認めていない思想である。それは全く客観性のない、人間同士の独り言に過ぎない思想である。したがって、人間は本質的には尊い存在とは言えないのである。それなのに人間は互いに他人の生命や権利を尊重し合って生きている。その根拠はどこにあるかという、以下のように述べられる。

人間はすべて、この世に生まれた瞬間から、“死にたくない、生きたい”という根源的欲求に基づいて生きている。この欲求を誰れも否定することは出来ない。この世は自分一人で生きているのではない。同じ欲求をもった大勢の人々が一緒になって生きているのである。つまり、社会とは、生きたいと願う人間の集団なのである。したがって、その中のある人が邪魔だからとて、他人の生命や権利を侵そうとすれば、逆に、自分がその相手や身内、社会等から報復を受ける立場となり、安泰ではいられなくなる。こういう報復の論理は人類の、いや、生命の発生時から自然の論理として存在していた。自分が安全でいられるた

めには他人の生命および権利を侵さないことが原則であり、一番である。大勢の人々が一緒に住んでいる今日の社会で、他人の生命を尊重し、互いに人をたて合って生きている根拠はここにあると私は思う。

我々は、こういう普遍の根本論理をしっかりと認識して、互いに人をたて合って生きるのが本来の生き方であるということを悟らねばならない。そして、互いに人をたて合うこと、譲り合うこと、これが人間尊重の基本であることを認識しなければならない。これは第三の社会においても強く要求される態度である。第三の社会の根底にはこういう合意がなければならない。

七、 世界国家

文明社会の具体的な拡大の形態は、最初、地球上に広く点在していた何千何万という小集団の社会が、幾つかずつ統合することによって中集団の社会となり、その中集団の社会が、さらに統合することによって大集団の社会になってきた。これは、文明社会自体に目標があるわけではないが、文明社会の中に必然性の論理が働いていて、人口増加にやや比例して、文明社会は小から大へと雪ダルマ式に拡大してきたのである。この運動は、地球が一社会となるまで続き、その実現の暁にとまるというものである。こういう必然性の論理から言って、当然の帰結として、近い将来、地球上のすべての社会が実質的な一社会になるに違いない。それが戦争によってなるか、平和的になるかは別として。この必然性は文明社会の誕生と同時にあるので、世界がやがて、一社会化することは、文明社会誕生の時からすでに運命的に決まっていたと言える。このことは、ひるがえって考えてみると、人類が、太古、一つの社会から出発したのであるが、今日、再びその一つの社会へ戻ろうとしているとも言えて面白く感じられる。以上のことをもう少し具体的に述べてみよう。

原始時代には、全地球上に何千、何万という小集団の社会が点在していた。数字だけから言うと、これは、今の我々には全く想像さえ出来ないほどの数である。どうして、そんなに点在していたかと言うと、人類が約二百万年前にアフリカ大陸に発生して以来、自然の食糧を求めて生活していくのに小集団の社会が都合がよかったところから、人口増加に伴って社会の数は核分裂を繰り返して増え続け、最後には、全地球上に何千、何万という社会が薄く点在することになったのである。ところが、文明時代になってからは、農耕による生活のため定住するようになり、小集団より中集団か大集団の社会の方が外敵に対しても、経済活動をする上にも都合がよかったところから原始時代とは逆の形をとった。先ず原則として、何千、何万とあった社会は、それ以上分裂することなく、人口増加から、それぞれが膨張するようになった。一方、人口が増加したそれらの社会が存在していくためには、土地や労働力(奴隷)が必要となり、弱肉強食的に強い社会が弱い社会を征服して吸収

し、収斂的に拡大することになった。そして、次第に、幾つかの小集団は寄り集まって中社会となり、さらに幾つかの中社会が統合し合って大社会へと拡大していったのである。このことは各国の歴史を振り返って見れば明らかであり、仮に、アメリカ等のように純粹にこういう形をとらないような国にしても、この変形としてなったと言える。また、現在、植民地が独立したりして国の数が増加しているが、これも長期的にみれば一時の過渡的現象と思われる。このように社会は人口増加によって必然的に小から大へと雪ダルマ式に拡大しているのであるが、この拡大は必然の論理によるため、世界が一つの社会になるまで続くのである。この必然の論理とは、人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理であるが、これが有限な地球上で現実化しているため、世界が圧縮的に収斂へ向かっているのである。

しからば、そうしてなった社会は平和で理想の社会かということ、さに非ず、それは内乱が多発し、そして、破滅へ向かう社会である。人口と食糧と頭脳の拡大循環の必然の論理に引きずられてなる世界の一社会化は、限界を招いて内輸操めし、そして、破滅へ向かいこそすれ、平和で理想の社会とはならないのである。そういう必然の論理によってなりつつある世界化を無条件に肯定して、今日、口を開けば国際化、世界化と言っている。今日、多くの人々は、教育、経済、政治をはじめとするすべての問題を国際的に考えれば解決出来ると錯覚しているのではないだろうか。もちろん、国際的に考えれば埒があく問題は多い。だからと言って、国際的にさえ考えればすべての問題が解決出来ると見るのは正しくない。世界は必然の論理から言って、やがて実質的な一社会となり、今日、一国内で解決出来ない問題と同じ問題を抱える社会となるのである。したがって、遠い展望をもたないで、世界化を無条件に肯定して、その方向でばかり問題を解決しようとする態度は本質からいって間違いである。このことを少し整理して述べてみよう。

今日、口を開けば国際化、国際化と言っている。なぜか。今日は国際化の時代だからか。なぜ国際化するのか。その意味を本当に知らねば、ただ国際化の流れに添って、国際化がいかにもいいことのように無条件で肯定してしまうことになる。国際化すれば何事も国際協力のもとでやれる。戦争もなくなる。恒久平和も可能となるように表面的には考えられる。しかし、国際化はそういうことが望ましいから、皆の力で徐々に実現しているとは言えない。必然力によってなっているのである。この必然力による国際化は表面的には無条件で肯定したくなるような面を見せながら、本質は第二の限界へ向かっているのである。言い換えると、世界が一つになるということは、人口が世界に一杯になるということである。人口が地球を覆うことである。人口が多くなれば、チャールド・シャルダンも『人間の未来』の中で述べているように、人口の圧力によっていかなる曲折があろうとも収斂の結果、世界は実質的な一つの人類社会になろうとする。こうしてなった世界社会は決して理想の社会ではなく、やがて、完全に行き詰まって破滅する運命の社会である。

それでは、どうすれば理想の世界国家が実現出来るか。世界国家は第三の社会である。第三の社会はシンクタンクによって計画され、運営される社会である。したがって、シンクタンクが完全なものとなれば実現出来ると言える。つまり、シンクタンクにて英知化した

頭脳で世界国家を計画し、世界国民の合意を得て必然力を誘導的に応用して、先取りの実現することである。世界国家の実現は少々時間をかければ不可能なものではない。一方に、人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理によって収斂していく必然力をもった強力な内因があり、他方に、国連があり、世界連邦的な思想がかなり普及して合意の下地が出来ているからである。

ところで、理想の世界国家、すなわち、第三の社会とはどういう社会かという、英知先頭の社会であること、合意による社会であること、永遠的に行き詰まらない社会であること、戦争のない平和な社会であること、平等な社会であること、自由な社会であること等、主なものとして以上のようなものが挙げられる。このうち、前二者はすでに述べたので、後四者を以下 ABCD の順に述べていく。

A．永遠的に行き詰まらない社会(地球に均衡する社会)

永遠的に行き詰まらない社会とは、第一や第二の社会と異なり、永遠的に限界に突き当たることのない社会ということである。社会を限界に突き当たらせる要因には、人口増加と資源の枯渇と環境破壊とがある。したがって、これらの要因をコントロールすることが永遠化の条件とも言える。これはシンクタンクの仕事であるが、ここでちょっと述べてみよう。

第一に人口増加のコントロールについてである。常に人口増加が問題になるのは、主として食糧に対してである。したがって、人口問題は食糧問題と言ってもよい。第一の生き方が限界に突き当たったのは、自然の食糧に対して人口が絶対的な過剰となったことからであった。今日の限界性も本質的には全く同じである。つまり、今日の限界性は、人為的な食糧に対して人口が絶対的に過剰となりつつあるところから起こっているのである(ただ今日は環境破壊による限界性が表面を覆っているので本質が見えなくなっているだけである)。したがって、この一番の限界の要因をコントロールせずしては今日の限界、すなわち、第二の限界を乗り越えることも、第三の社会へ移行することも不可能である。今日、全世界的に人口抑制策がとられているが、人口増加率は一向に衰えず、逆に上昇さえしている。人類は一日も早く全世界的な合意を得て、人口抑制に成功し、有限な地球に均衡した生き方とならなければならない。しかし、ここまで来てしまった人類が、それに成功するためには、統一認識の下で系統的に作られた人類の真の頭脳に頼る以外はない。つまり、シンクタンクに頼る以外はないということである。したがって、一日も早く真のシンクタンク作り成功することが、永遠的に行き詰まらない社会を実現させる条件と言えよう。第二は資源の枯渇のコントロールについてである。今日の工業は地球の各種の資源によって支えられている。しかし、資源が有限であるのに対して、工業は拡大する一方なので、

資源の枯渇が目につくようになってきた。資源が枯渇し工業が下火になれば、それに比例するように工業によって支えられてきた人口は激減しよう。どこまで激減するかというと、最悪の場合、農業だけで支えられる人口まで激減すると考えられる。しかし、工業化の下火は農業の生産性も下げるので、農業だけで支えられる人口は意外に少ないとも考えられる。そうならないようにするためにも人口増加を止め、経済の成長も止めて、資源の管理をし、農業を中心とした循環経済に一刻も早く換えなければならない。

第三は環境破壊のコントロールについてである。前章の「自然の性質」のところで自然の性質をみたが、自然環境は生物である人類にとって都合の悪いことに、どこまでも悪の方向へ変化していく性質をもっている。文明の発達ということは、自然環境の中に人類環境を作って、それを自然環境の中に挿入していく過程でもあるから、裏を返すと、文明とは人類にとって都合の悪い環境作りをしていることでもある。それは前述した人口増加と工業の成長に深く関連している。したがって、それらの成長を止め、自然環境の変化を人類の体内環境の幅以内にとどめなければならない。以上のことについては各所で触れてきたので、ここではこれ以上触れないが、とにかく、有限な地球に英知で人類側から全くうまく適応してこそ、永遠的に行き詰まらない”地球に均衡する社会”を実現することが出来ると言える。

B.戦争のない平和な社会

戦争、それは人類にとって最もいまわしいものであるが、その動機は常に文明社会の必然的な収斂(人口圧力による再組織化的拡大)の運動法則の下で作られてきた。もう少し具体的に述べると、文明化してからの各社会は収斂の運動法則の下で人口が増加するに従い、いかなる曲折があろうとも一つになろうという方向を辿ってきた。その際、意識が低く、偏見、エゴが強く、排他的であれば戦争、その逆であれば平和的に一つになろうとしてきた。これまでの大半は意識が低く排他的であったため、戦争によって拡大してきた。収斂の運動法則は世界が一つになるまで続くので、これからも戦争による拡大の可能性は続く。しかし、これからは何としても戦争は避けて、人類のはっきりした意思で世界化を図っていかなければならない。それは二つの理由からである。

その第一は、今日の兵器の破滅性からである。現在、世界各国で保有している核兵器の総量は人類を二回も三回も破滅出来る量と言われる。したがって、核兵器を用いる全面戦争が仮に起こったとしたら、収斂どころか人類の終りとなってしまう。そこでは誰も得をするものはいない。“命あってのものだね”という諺がある。そういう戦争は避けて平和外交に徹すべきである。大体、それだけの犠牲をもしも払う気があるなら、譲り合いの精神で何事も出来ないことはない。とにかく、世界化は戦争を避けて平和的に実現すべきであ

るということである。これが第一の理由である。

第二は、世界国家は先取りしないと意味がないからである。前述したように、世界はこのまま放っておいても実質的な一世界となる。それは戦争によるか平和的になるかは別として、必然的な収斂の運動法則(この本体は人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理)によってなるものである。そうしてなった社会は内乱に明け暮れることになる社会であると同時に、自然のあらゆる限界に突き当たって、やがて、破滅してしまう社会である。したがって、そうならないためには、必然の論理にただ合わせていく今日の行き方を改め、必然の論理を逆に誘導的に応用して、人類の意思で平和的に世界国家を先取りする必要がある。ここに、戦争を避けて人類の意思で世界化を図るべき第二の理由がある。

世界国家、すなわち、第三の社会はシンクタンクによって実現されるべき社会である。したがって、今述べたこともシンクタンクの問題である。こうしてなった世界国家は、シンクタンクによって一警察国家として、平和的に運営されるに違いない。内乱の要因もすべてコントロールされて。

C. 平等な社会

世界国家において人類が内輪揉めをしないで永存していくためには、すべてが平等でなければならない。いかに合意に達した、おおらかな世界国民であっても、すべてが平等でなければ何時かは堪えられない時がこよう。したがって、世界国家の前提条件の一つに平等がなければならないことは言うまでもない。世界国家はアメリカ合衆国のように組織されるだろうから、問題となるのは各州毎(前各国毎)の面積の相違、人口密度の相違、食糧生産能力の相違、資源の多少、経済力の相違性、人種混交の排他性等の調整であろう。しかし、これらは国内問題として運命共同体意識の下で解決出来るものと確信する。解決出来なければ世界国家はなく、世界国家がなければ人類の未来もないことを合意するからである。大体、今日の土地面積の相違、資源の多少、経済力の相違性その他の多くは偶然のチャンスによって、また、早いもの勝ち、弱肉強食等の論理から生じたものである。それを人類永存のために世界国家が、世界国民の合意を得て再編成、再組織化しようというものであるから合意出来ないはずはない。もちろん、完全な平等のためには相当長い時間がかかるであろう。しかし、いくら時間がかかっても合意に基づく話し合いによって実現しなければならない問題である。この問題については後でまた、「日本と世界」のところで少々触れるので、簡単だが以上とする。

D. 自由な社会

自由とは何人からも干渉を受けず、思い通りになることであり、これは万人の望むものである。人類の生き方の理想もこの線に添って、自由にしてすべての欲求が充たされるような生き方とされている。しかし、自由というものは無限にあるものではなく、ある一定の分量があって、それを皆で分けあって使うようなものであるから、人口が増えてくると、それだけ分け前が少なくなり、なかなか思い通りの生き方が出来なくなってくる関係にある。したがって今日のような過密の中で、その精神に添った自由にして理想的な生き方をしようとするならば、かなりの技術がいる。技術とは計画、整理、組織化と言える。過密化した社会には、それに比例した計画性が導入されないと、自由にして理想的な生き方どころか、社会自体が行き詰まりかねない。今日の社会は多くの法律や制度で複雑に高度に計画化された社会である。そのように社会が計画、整理されているからこそ、今日の程度に自由が保証されていると言える。その中でも代表的な例は交通問題である。増加する車と道路作り、ルール作りが追いかけてこしているが、成功している例だと思う。社会のすべては交通問題のように計画的に行なわねばならぬものばかりである。しかし、交通問題の計画化のようにすべてが成功してはいない。すべては統一計画下で抜本的に行なわれず、つまり、対症療法的にしか行なわれていないので、全体としてはかなり複雑な社会となっている。

世界国家はシンクタンクによる全くの計画社会である。したがって、過密の中にも整然としていて、今よりもっとゆとりのある、自由のある社会と言える。もちろん、世界国家は世界国民が合意によって作る社会であるから、イデオロギー等によって誰も束縛されない社会である(世界国家は統一認識に基づく社会であり、無イデオロギーの社会である)。

要するに、地球は一定である。そこへ人口が無限的に増えて、文明も複雑化してきている。それゆえ、しっかりした社会の秩序作りをしないと、自由どころか生きがいさえも感じられない社会となってしまう。そこで、社会の秩序作り、計画化が必要なわけであるが、押し寄せる勢力に勝てず、押し流されつつあるというのが現状である。もっと、抜本的に本格的にやらねば自由が失われてしまうという憂いに答えるのがシンクタンクによる計画社会である。つまり、世界国家である。

過密の中で、より自由であるためには、徹底した計画、整理、組織化が必要なのである。過密がますます進行していけば、計画、整理、組織化という言葉は自由と同義語になっていくだろう。

八、労働と余暇

人間の欲求は多様で無限である。工業社会は人間の欲求を、欲求 - 目的 - 欲求と数珠繋ぎによって無限化することが出来る。もし、人間の欲求が無限化したなら、世界中に工場をいっぱい建てても足りることはなくなる。今日、この傾向にある。この経済の傾向を、どこまでも支持しているのが、企業は善、労働は善という思想である。企業は利潤追求だけの目的から組織をどこまでも拡大し、贅沢品や薄価値なものをどんどん作り、宣伝に次ぐ宣伝で商品売りまくり、人手が足りなければ人口を増やせと主張する。一方、労働者も労働を善と信じ、”働かぬもの食うべからず”の制度を無条件に肯定し、どんな薄価値なものを作る会社でも、給料を多くくれる会社は良い会社だと単純に考えて、もくもくと働いている。この経済の論理は、もちろん人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理を根底として起こっているが、経済の論理にどこまでも調子を合わせていくと、当然起こるのが地球生態系突破による環境破壊である。

今日、環境破壊の問題が大問題となり、また、無制限な生産の反省等から、操業短縮、すなわち、週休二日制の思想が生まれてきた。しかし、生産は地球生態系内で循環的に行なうべきだという思想が徹底するにつれて、ますます、操業短縮は本格化して、週休三日制、四日制となっていくものと考えられる。そうでなければ、地球生態系内で経済を永遠的に維持することは出来なくなるからである。

第三の社会は、有限な地球の能力に合わせて運営する社会である。そこでの経済は循環経済であり、成長はほとんどない。したがって、週休四日制か五日制の社会になると思われる。こうなったら、”働かぬもの食うべからず”という制度を廃して、二、三割の専門的な人々にのみ働いてもらい、残りの七、八割の人々には、世界国家が生活を保障して、趣味に生きてもらうというのも一つの行き方である。世界国家の経済は国家の経営であるから、それをやる気なら出来る。そうすれば失業問題もないから円満に行く。もちろん、二、三割の労働者、農民、科学者および政治家等には、何か特別の条件によって、または交替制によって働いてもらうことになるだろう。ところで、七、八割という余暇人間(仕事についていない人)の数に驚かれる人もあるかも知れないが、今日でも五割前後もの余暇人間がいることを考えた場合、少しも驚くべきことではない。今日の余暇人間を数え上げてみると、高校生以下の大半の子供たち、大学生、大学院生、主婦の過半数、老人、病人の大半、財産があって寝食いしている人、失業者その他となる。七、八割の余暇人間とは、この数字を少し増した数字に過ぎないからである。

次に未来の余暇について述べてみよう。

今日の余暇は休日を積極的に、金をかけて過ごすことだと思われているようであるが、間違っているのではなかろうか。それはまるで、遊んだことのない人間や、暇をもったことのない人間が主体性を持たず、遊び方や暇の過ごし方はこのようにするのだと、余暇産業におどらされて踊っている姿でしかない。余暇とは仕事をせずに自分で勝手に使える時間、つまり、ひまなことを言うのであって、余暇産業とは関係なく、全く思い思いの過ごし方をするのが本当であると思う。余暇産業のPRに乗ってかけずり廻るのは邪道であり、仮に、

何回かは乗れても一生の間、乗れるものではない。ましてや、大部分の人にとって、余暇が百パーセントとなる第三の社会においてはなおさらである。第三の社会の余暇は内面の充実、つまり、文学、詩歌、音楽、書道、絵画等の芸術、科学研究、スポーツ等において費やされるべきである。今日、仕事をするのは人間の本能であり、仕事を通じてこそ本当の生きがいと得られると言われる人もいるが、私はそうは思わない。私はむしろ、逆に、遊びが人間の本質だと思っているからである。遊びというのは無限である。大昔の人間も多分、遊びの中で過ごしたと思われる。第三の社会においても、循環経済を乱さない範囲内で遊びが開発されて退屈のない過ごし方がなされていくものと思われる。とにかく、第三の社会の生き方は自然生態系内で秩序よく生きることが至上命令である。未来の人々はきっと、それに添う生き方をしていくに違いないと思われる。

九、日本と世界

日本の明治以降の中心的な価値は、外国に追いつけ、追い越せであった。戦前はイギリス、フランスあたりが目標とされ、戦後はアメリカが目標とされてきた。しかし、追いついて満足すべき立場にたつたはずであるが、果たして、追いついてしまった日本は逆に、目標を失って混迷することになった。この点でアメリカと似ている。というのは、かつては、後進国であったアメリカもヨーロッパを目標として大国化したが、ヨーロッパに追いついてしまって現在混迷しているからである。これからはいやでも応でも、日本が道のないところを世界で一番先に歩まなければならない立場になった。その際、世界の国々は日本の試行錯誤の行動をかなり参考にして、それぞれの歩みを決定していけるが、日本は何を基準に行動すればよいか、これが大問題となっている。

しかし、そういう心配は、もはやいらぬ。これからの日本は、これまで述べてきた統一認識に基づいて行動すればよいからである。具体的には日本は、人口と食糧と頭脳の拡大循環の論理や収斂の法則をよく認識して、地球生態系に合う世界秩序作り、いや、世界国家作りをする方向をとるべきである。その行き方はあらゆる法則と噛み合うので、あらゆる問題はその過程で解決出来る。これからの日本の行く途はこれしかないし、世界人類のためにもそういう方向をとるべきである。

日本は一九四五年八月、第二次世界大戦に敗れて八千万の人口が総面積僅か三十七万平方キロの四つの島に住まねばならなくなった。もともと日本は資源や食糧が足りず、その問題解決のために戦争をしたのであったが、皮肉にも敗れてしまって凄い人口過剰のつらい体験をしなければならなかった。ここで日本の生きる途は加工貿易しかなかった。幸いなことに日本は”国敗れて山河あり”で、電力を起こす水があった。そこで川を塞ぎ止め、電力を起こし、輸入した資源を加工して製品にし、それを輸出して、その儲けで食糧を輸

入して食べることが出来るようになった。それ以来日本は各国と仲良く付き合いねば存在出来ない国となったが、事実、そのような付き合いをして貿易で成長し、世界第三の経済大国にのし上がった。

幸運なことは他にもあった。人口問題、資源問題を解決するために帝国主義的な戦争をしたのであったが、敗れてしまったので、それらは戦争によっては解決出来なかった。しかし、戦後の世界は植民地抜きでもやっていける経済体制に変化して、日本は成長出来る立場になったのである。戦争でさえ叶えられたかったことが、戦後の世界の経済体制の変化によって、あっさり叶えられることになったのである。全く、幸運という他はない。もし、世界が今でも帝国主義を堅持していたなら、日本はきっと四等国以上にはなっていなかったろう。今日の日本経済の成長は、いくつかの幸運に支えられてなったが、その根本をなしたのは狭い土地、限られた資源、限られた食糧の日本にとじ込められた八千万人のマンパワーだったと言える。言い換えるなら、八千万人の生命に対する欲求、執念であったと言える。それは今でも続いているのである。

ここに、経済の大発展があって先進国となったと同時に、公害先進国となった理由もある。公害とは環境破壊のことである。前にも述べたように、環境破壊は文明や経済の発達と平行して起こるもので、日本の先進国化はそのまま公害先進国化ともなったのである。日本は加工貿易立国ゆえ、狭い日本を工場化することによって経済的に大発展出来た。ここに、公害先進国ともなった理由があるのである。つまり、経済先進国も公害先進国も同根から発しているということである。

今日、日本は八千万の人口の時と同じ面積に一億一千万の人口を抱えながら、人口過剰という言葉はほとんど使われていない。なぜか。それは加工貿易によるからではあるが、少々見方を変えて考えてみると、それは実質的な意味で、国土を拡張して生きているからである。確かに日本は同じ面積であり、そして、一億一千万の人口のほとんどはそこにのみ住んでいるのであるが、農産物の大半、工業資源のほとんどその他を外国で生産しているため、実質的には三十七万平方キロの面積の日本ではなく、百万平方キロ以上の面積の国と同じ国であると言える。そのために人口過剰感はないのである。これは戦後の世界経済体制の変化のお蔭である。

しかし、それは飽くまでも他国の土地および資源の利用であり、不安定なものである。その他国に、もし、人口過剰その他の事情が起こって、それらのすべてが利用出来なくなったら、日本は三十七万平方キロの面積に一億一千万人以上が、いやが応でも住まねばならなくなる。そういうことになれば、日本は世界の人口過剰国となり、世界で一番先に破滅する国となろう。それを避けるためには、今から日本は人口を減少させる必要があると同時に、食糧の自給化をはからねばならない。しかし、その頃になると日本だけでなく、世界の多くの国々が日本と同じような立場の国になるに違いない。もちろん、そうであっても、未だ余裕のある国もあろう。しかし、そこに必然的に起きるのは世界的な戦争である。そうなったら幸せでいられる国は一つもなくなる。そういうことが、今から読みとれる以

上、世界を先取りの永続的に破滅しない一つの組織体に作りかえるべきであり、日本はその世界国家作りのリーダー国になるべきである。つまり、日本は日本だけのことを考えても解決出来ない国になるし、諸外国も自分の国のことだけを考えても解決出来ない国となる。したがって、収斂の法則に則って永遠に破滅しない世界国家を先取りに作って、人類はそこで仲良く暮すべきであり、日本はその世界国家作りを積極的に推し進める国とたべきだと言うことである。

世界国家作りのための日本の音頭取りは、日本がピンチに陥ってからでは、見え透いた行為としてどこの国からも相手にされなくなると同時に、その頃になっては世界国家作りは不可能な段階に入ってしまう。したがって、早ければ早いほどよく、今から始めるべきである。

その作業の手順は、先ず、統一認識を更に吟味し、それに基づいてシンクタンクを組織し、世界国民を英知化させ、地球と均衡調和する連邦的な世界国家を建設するという順に行なわれるべきであろう。繰り返すが日本は自分からすすんで地球生態系と合致する世界国家建設の立役者になるべきである。

もちろん、世界各国も世界国家作りに参加すべきことは言うまでもない。

あとがき

私はこれまで、次のように考えてきた。

現代の危機的な混乱した社会にあって、本当に人類を憂い、本格的な社会の改善をしようとするならば、逆説的に聞こえるかも知れないが、大政治家になることでも、学者になって人材育成に力を入れることでも、デモを起こして政府に改善を要求することでも、宗教家になって人間改革をすることでもない。よく考えずに軽々しく行動することは、かえって社会を一層混乱させるばかりである。少々時間をかけても、今、最も必要とされている自然と社会と人類の統一的な論理をはっきりととらえ、そして、その統一的な論理を人類に披瀝することである。これこそが一番大事なことであると。

これは一見、消極的な態度に見えるが、非常に積極的な態度であると私は確信してきた。急がば回れ式の考え方である。私はこれまで、政治にも学問にもその他にも一切口を出さずに、ただ自然と社会と人類の関係に神経を傾けて、ひたすら思索を続けてきた。そして、その認識をようやく本にすることが出来た。この本に書かれている論理は、恐らく、今日の人類にだけでなく、永遠の人類の指針となろう。

私はこれを契機に、一切の沈黙を破っていよいよ活躍したい。それは先ず、この論理の徹

底普及であり、そして、人類の未来の産婆役としての活躍である。この本を読んで真に共鳴された人は、一人でも多くの人にこの論理を知ってもらうよう啓蒙してもらいたい。つまり、正しい世界世論の形成に共に活躍してもらいたいということである。

未来は我々次第で破滅とも永遠ともなる。そのカギを握るのは正に我々自身である。そのことを心に深く刻んで行動しなければならない。私は未来を永遠へとつなぎとめたい。そのために、これから最大の努力をしたいと思っている。